震災関連記事のみの抜粋です

中外雑記

神社界

震災一年に震災記発刊

●兵庫県西宮市に鎮座する西宮神社（吉井良隆宮司）では、吉井貞俊権宮司がスケッチした兵庫県南部地震の様子を収録した『西宮からの発想・阪神大震災記』が、震災から丸一年経った十七日に刊行された。地震の激しい揺れで境内に立っているものは殆ど倒壊したといわれる西宮神社だが、吉井権宮司は「震災の爪痕を後世に伝えたい」と、境内の様子を描くとともに、阪神沿線の西宮～元町の間約十五キロの沿線風景を歩いてスケッチし、震災の恐ろしさを記録した。吉井権宮司はこれまでも阪神沿線や新幹線の車中から見た風景などを名人芸ともいうべき早技で流れ絵図に描いてきた。震災後は西宮や芦屋の三十八神社の様子もスケッチして、大社だけでなく小さい神社がいかに大きな被害にあったかも紹介した。今回の出版は、八年前に描いた阪神沿線と同じ景観を震災後に描き直したものの。十五キロの沿線風景を全て描いているため、吉井権宮司は巻紙四十五メートルもの分量をスケッチしており、その縮小版として二十七ページにわたる「平成地変図」が収録された。吉井権宮司は今回の出版について「八年前は、『百年後には街並みも大きく変わってしまうだろう』と思って記録を残すために『景観図』を作ったが、震災でこんなに早く変わってしまったとは。今度は少しでも早く、復興した街並みを描きたい」と話している。この本の中には「震災で見直す日本美と神道」、「阪神沿線各駅」といったタイトルで吉井権宮司が心情を綴ったエッセーも収録されている。

実業

高まる仏像の支持

●松久宗琳仏所 同仏所（松久佳遊代表、京都市中京区御幸町三条下ル）は、昨年十二月に東寺真言宗明照寺（榎本博一住職、神戸市長田区西代通二ノ四ノ二二）へ薬師如来三尊像＝写真【写真は省略】＝を納めた。薬師如来像は総高四尺七寸、脇侍日光・月光は総高三尺一寸、台後背は金箔仕上げ、本体は桧木地・きり金仕上げ
▽同像には、胎内仏として白檀製の小さな薬師如来像が収められている。この胎内仏は十数年前に、榎本住職が故・松久宗琳大仏師に制作を依頼したもの。はじめは榎本住職の四国巡拝時の懐中仏とする予定だったが、完成したものが立派だったため、懐中仏ではなく同寺に安置されることになった。しかし、一年前の兵庫県南部地震で同寺は全壊。同じ被災者のためにも法要の場を作ることが大事と、榎本住職は何よりも先に本堂の再建を目指した。自らは仮住まいをしながらの本堂再建は進み、続いて六月には破損した薬師如来像の修復を決意した。像の修復が進むなかで、これを大きな薬師如来三尊像の胎内仏とすることになった。榎本住職はこの一年を振り返り「一年のはじめであるこの正月には、神戸の鎮魂・再生を願って薬師如来様を拝みました。震災直後から比べますと、本堂再建など自分一人の力ではどうしようもないことも、様々な力に助けられ少しずつ良い方向に向かっています。震災に合うことで知った仏縁・仏の力の尊さを実感しています」と話す。同寺の修復作業は今後も続けられる
▽同仏所では、この一年間で震災の被害を受けた二十体余りの仏像を修復した。通常の仏像修復は、膠や彩色部分の緩やかな劣化によるもの。震災のように急激に破損するのは極めて稀なことで、その破損は人間でいう複雑骨折にあたり、修復も“外科手術のよう”だったという。同仏所では「仏様も、人間と同じ痛みを感じているのでしょ

う。作業中は、その痛みが私どもにも伝わってくるようで、気の毒でした」と話している

浄土

震災一周忌追悼念仏行脚

●**浄土宗** 全国浄土宗青年会（神田眞晃会長）では、六千三百人もの犠牲者を出した兵庫県南部地震の一周忌を十七日に迎えたことから、犠牲者の回向・追悼のため、十四日から十七日までの四日間、延べ約百人の浄青会員が参加し、総本山知恩院から神戸まで約八十二キロの念仏行脚を実施した。出発日の十四日午後一時に饅頭笠に黒衣、手甲脚半姿の約三十人の会員が総本山知恩院に集合、中村康隆浄土門主を導師に法要を執り行なった。中村門主は法要後、「阪神・淡路大震災から一周忌を迎え、犠牲となられた方々、震災に遭われた方々をお慰めするための行脚を計画され、たいへん有り難く思う。人生には一寸先に大きな災害が訪れることもある。そうした災難をはねのけ、勇気を奮い起こすことが真実の生き方だと法然上人は教えられている。一年が経過して、被災地では悩んでおられる方も多い。まごころを尽くして、勇気を奮い起こして頂けるよう、被災者の皆さんを励まして頂きたい」と青年僧らに垂示。また一宗を代表して、蓮地瑞旭同和推進事務局参務も「行脚は我々一人ひとりが法然上人の生まれ変わりと自負し、法然上人の心を体して、法然上人が歩いていらっしゃるごとく歩いて頂きたい。現地では犠牲者が六千三百人にもものぼったが、ここからの追善のお念仏をお願いしたい」と青年僧らを励ました。青年僧の一行は、法然上人の御影前にともされた灯明から採火し、中村門主から託されたともし火を先頭に知恩院を出発、被災地の神戸に向かった＝写真【写真は省略】。十七日には兵庫浄青のメンバーも合流し、震災後救援基地となった尼崎市の常楽寺で午前五時半から、知恩院の宝前で採火したともし火を掲げ、一周忌法要を執り行なったあと、神戸に向かい、午後三時から伊藤省三住職が犠牲となった東灘区の西福寺で一周忌法要を営んだ。